

暮らしの中の生きものたち

梅の樹木毛

エナガの古巣を森のセンターギャラリーで展示しています。うまく全体が枝から落ちたものもよく形が保たれ、出入り口の穴からは中にたつぷりと詰められた羽毛が見えます。クモの糸で巣の表面に繋ぎ留められているのはウメノキゴケ、乾燥して白くなりながらもその丈夫さに一役かっているようです。

去年の秋に拾えたものは、ウメノキゴケの輪っかのような巣の一部でした。ウメノキゴケを使うのはエナガ、サンコウチョウ、サンショウクイ、コサメビタキです。こんな上半分を残したのは、サンショウクイかコサメビタキでしょう。サンショウクイは山椒を食べたような声だと名付けられた夏鳥で、「ヒリヒリ」という囀りもよくききます。去年の初夏の頃、高い木の上で子育ての風景が繰り広げられていたのかもしれませんが。

ウメノキゴケを外壁にあしらうと、巣が丈夫になるだけでなく、周囲にとけ込んで目立たない効果も期待できそうです。湿度の高いこの辺りにはウメノキゴケ科の仲間がたくさん暮らしています。サクラやスギの他、様々な広葉樹にも見られ、幹や石垣などでは円を描いて広がっています。コケの観察会でウメノキゴケを見つけた子どもが、苔の先生にそれはコケではないよと教わって、あれ?となった顔は印象的でした。ウメノキゴケは地衣類なのです。

地衣類とは、菌類と藻類が共生する姿、菌類の生き方の一つと捉えることができます。『菌類のふしぎ』（国立科学博物館編）では「特殊な栄養獲得形式を確立した菌類といえる」と解説されていました。

地衣類を形づくる菌類は、その殆どが子嚢菌です。子嚢菌とは子嚢という袋を持つことで分類される大きなグループで、酵母や青カビなども含まれます。この辺りで観察できるきのこには、春を告げるアミガサタケ、ツバキの落花に合わせた顔を出すツバキキンカクチャワಂತケ、夏に多い冬虫夏草、落枝に出るビョウタケなどがあります。トリュフも有名です。地衣化するものはチャシブゴケ目、モジゴケ目、ツメゴケ目、サラゴケ目など子嚢菌の半分近くにも達するといわれ、地衣類の多様性が浮かび上がってきます。

地衣化とは、子嚢菌の菌糸が集まり、緑藻類や藍藻類（藍色をしたバクテリア＝シアノバクテリア）にすみかを提供しながら、藻類が光合成で産み出す糖をもらい受けて、従属栄養者である菌類の生活を成り立たせている姿のことです。

ウメノキゴケはチャシブゴケ目の一種が緑藻のトレポウクシアと共生している姿、モジゴケ、ホソモジゴケ、スジモジゴケなどはそれぞれのモジゴケ目の子嚢菌が緑藻のスミレモと共生している姿。このように、1種類の菌類が決まった藻類と共生関係を結んで、1種類の地衣類を形づくります。

法然院では、北坂の石垣に多いスミレモが体に含まれるカロチノイドで黄色く目立っている傍らで、まったく目立たないモジゴケたちが辺りの木々の幹に張り付いて、それぞれの「文字」模様を描いている様子が観察できます。

日のあたるツバキの葉の上によく見られる地衣類のアオバゴケには、もうすぐ葉ごと地面に落ちるものもいるかもしれません。春から初夏は常緑樹の落葉の季節、そして、ツバキの葉は日陰よりも日向のものの方が寿命が短いのです。

そんな様子を見下ろしながら、エナガはウメノキゴケに囲まれた巣で子育てを終えた頃でしょう。サンコウチョウやサンショウクイもそろそろ南のくからやってきて、ウメノキゴケを集め始める頃でしょうか。

鳥の巣にも見られる菌類と植物と動物との関係が、いつまでも大切な複雑さを伝え続けてくれますように。



展示のエナガの巣
2007年のもの



輪状の巣 2017.10



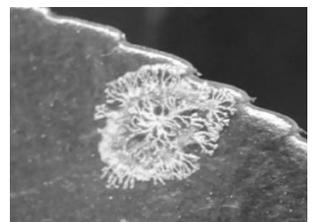
マツゲゴケ(ウメノキゴケ科)
2017.12 京都御苑にて



ウメノキゴケ
2018.1 法然院の南にて



モジゴケの仲間
2018.4 法然院にて



アオバゴケ(3~5mmほど)
2018.1 哲学の道にて